お盆特集「生きる」

お盆だからこそ考えたい 生きるということ

お盆になると大切な人を思い出します。
私に温もりをくれた、あのやさしい笑顔。
今、あらためて、
私に願われたこととは何か、
一緒に考えていきましょう。

特集1～5面

お盆の迎え方 実践編

お盆の迎え方は？
何をやればいいの？？
難しく考えることはありません。
できることからはじめましょう。

まずは手を合わせることから

お盆の季節をどうお過ごしですか？「田舎に帰ってゆっくり過ごします」という人や「長期休暇で海外へ！」という人など、いろいろだと思います。でも、せっかくのお盆を観光やレジャーだけで終わらせてしまっていいのでしょうか。

そこで提案。今年のお盆は、まず手を合わせること（合掌）からはじめてみませんか。合掌は、感謝や敬いの気持ちを表す姿で、浄土真宗の基本ともいえるでしょう。

合掌のない生活は、他の人への思いが至らず、感謝の気持ちも薄れた生活ともいえるでしょう。難しく考えることはありません。合掌してから食事をいただくといった、身近な所からスタートしてみませんか。食事も多くの他のいのちをいただくということなのですから。

少しの時間、手を合わせてこれまでの慌ただしい日々を振り返り、忘れていた感謝の気持ちを思い出してみましょう。

◇

大切な人を亡くされ、寂しい思いの中で初めてのお盆を迎える人も少なくないと思います。「大切な人はもうこの世にはいないんだ」と、心にぽっかりと穴があいたような喪失感の中で日々を過ごしておられる人も、まず手を合わせることからはじめてみませんか。

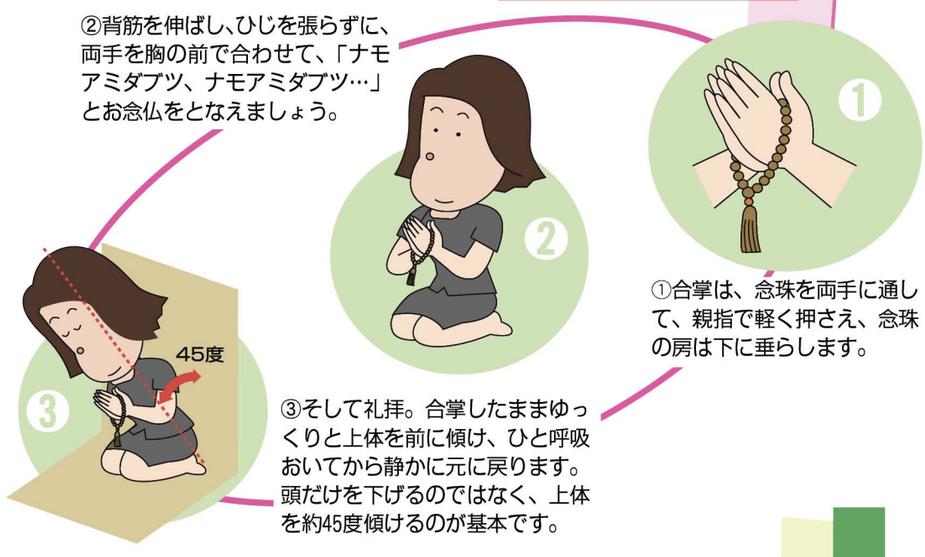
実践の第一歩です

合掌するということは、浄土真宗のみ教えを聞くための基本行為。仏さまの前で合掌し、「ナモアミダブツ」とお念仏することは、大いなる仏さまの世界に気付くきっかけになります。

人間の存在を超えた大いなる仏さまの世界に気付くとき、亡くなった人は消えてしまったのではなく、姿は見えないけれど、お念仏の中に語りかけ、その大いなる世界に導いてくれていると感じることができるのです。

合掌は、家庭でもできる浄土真宗の実践の第一歩なのです。

合掌・礼拝の作法



お寺とのご縁をつくろう

お盆にお墓参りをする人は多いのではないでしょうか。「お盆だからご先祖のお墓参りはあたりまえでしょう」と思っている人は素晴らしい！でも、その意味はとなると…。お盆だからこそもう一度、お墓参りの意味を考えていただきたいと思います。

お墓参りをなぜするのかと考える時、「先祖の供養のため」「お墓には先祖の霊があるので、お参りしないと悪いことが起こる」と考えている人はいませんか？　お墓参りは、先祖や大切な身近な人の死を偲び、いのちの大切さを思う上でもたいへん尊いことです。でも、お墓に先祖がいるわけではありません。

お墓参りだけでは…

自分自身のいのちを考える時、先祖をはじめ、多くの先人たちのおかげで今があり、そのいのちのつながりの中で、私はこの世に生を受けました。お墓は、そうした先人たちのご恩を思い、感謝する場所です。そして、墓前で手を合わせ先祖に感謝することを通して、今を生きる私自身が阿弥陀さまによって救われていくことを喜ぶことが最も大切なことです。お墓参りを通して、自らのいのちの行方に思いをめぐらすことが大切なのです。

ここでお願いがあります。お墓参りをすませてこれで大丈夫と思うのではなく、お寺にお参りしてほしいのです。

最近は、お墓参りはしたことがあるけど、お寺にお参りしたことはないという人が増えているそうです。お寺は、お葬式や法事を行う場所というイメージが強いかもしれませんが、本来は浄土真宗のみ教えを聞くための道場です。

できるだけ家族でお参りし、子どもさんにもお寺に接する機会を増やしていきましょう。

ご先祖のお迎えは不要

お盆になるとよくある質問がお仏壇の荘厳（しょうごん）についてです。質問の中には「ご先祖が帰ってこられるから」「お迎えして、お見送りしなくちゃ」といった意味合いのものもあります。

ズバリいうと、浄土真宗には「亡き人がお盆の期間だけ、家に帰ってくる」という考え方はありません。ですから、故人を迎えたり送ったりするという迎え火や送り火、故人の乗り物とされるキュウリの馬やナスの牛なども一切不要です。お仏壇の荘厳の基本は三具足（みぐそく）（花瓶（かびん）・ろうそく立て・香炉）です。

浄土真宗では、お念仏を喜ばれた大切な人は、阿弥陀さまのおられるお浄土に生まれ、仏さまとなられています。お浄土に生まれた大切な人は、お盆の期間だけではなく、仏さまとしていつでもどこでも私に寄り添い、迷いの世界にいる私をさとりの世界（お浄土）へと導いてくださるのです。

お仏壇はシンプルに

ですから、浄土真宗のお仏壇は、大切な人や私自身をお浄土へと救いとり、仏としてくださる阿弥陀さまが中心です。家族そろって手を合わせ、お念仏する機会をつくっていただきたいと思います。

本願寺新報
hongwanji journal
8月1日（木曜日）
毎月1日・10日・20日発行
発行所　本願寺新報社
京都市下京区堀川通花屋町下ル　浄土真宗本願寺派（西本願寺）本願寺出版社内
〒600-8501
電話 075(371)4171(代)／FAX075(341)7753

広げよう お念仏の声満ちる社会へ
―御同朋の社会をめざして―

目次（本号14ページ）

▶7
『拝読 浄土真宗のみ教え』を味わう
法話・「お盆」苅屋光影
▶8．9
おりんちゃんと歩く本願寺周辺
門前町の人気キャラクター・おりんちゃんが本願寺周辺の見どころを案内してくれます。
Let's Study 英語で仏教・真宗を学ぶ
▶11
親と子の童話「うまれたよ」服部千春
▶14
親子で楽しくクッキング
親子で一緒に食育について考えていきます。

赤光 白光

▼「いつやるか、今でしょ」が大ブレイク。勉強に限らず、私たちは知らず知らずのうちに優先順位をつけ、嫌なことや興味のないことはつい先送りにしてしまうが、この言葉は、漠然とした不安の中、当たり前のように日常生活を送る私の、こころの隙間をついたメッセージのようにも感じる。

▼今号は特集号として、テーマの一つに「お盆だからこそ考えたい『生きる』ということ」を掲げた。お盆はいのちへの意識が高まる時期だが、先祖に対してであったり、「人ごと」の域を出ないように思う。だからこそ、今しかない時を生きる私の問題として考えてもらうきっかけになればうれしい。

▼念仏者で医師の田畑正久さんは著書『今を輝いて生きるために』（樹心社）で、「将来、幸せになるために今、今日、その準備ばかりしている、そして死ぬまで幸せになる準備ばかり繰り返す可能性はないでしょうか」と問いかけ、「その延長線上には老病死の現実を乗り越えるすべはない」と訴える。

▼あるお寺の掲示板に「遇（あ）いがたきご縁に遇うのは『今』」。生を受けた以上、老病死には誰しも向き合わなければならないが、これを乗り越える道として、すでに私にお念仏が届けられていますよ、それを受け取るのは今ですよということ。仏教讃歌にある「いのち　まいにち　あたらしい」。その中には「いのち　まいにち　うつくしい」との歌詞も。「今、今日を初事として」と田畑さんはいう。確かなものに支えられながら、今、今日を生き切りたい。（S）

福岡支局 〒812―0002 福岡市博多区空港前 3-9-16 善教寺内
電話 092(621)5163/FAX092(621)9400
購読料 1部120円(年間4,080円) 定期休刊 7月10日、12月10日
浄土真宗本願寺派 代表電話
宗務所 075(371)5181／大谷本廟 075(531)4171
本願寺ホームページ　http://www.hongwanji.or.jp

季刊 せいてん
編集：浄土真宗本願寺派総合研究所　発行：本願寺出版社
読者と聖典をつなぐかけ橋に!!
―み教えを楽しく学ぶ学習誌。
年間購読料 2,800円(税・送料込)
1部700円(税・送料込)
年4回発行(3月・6月・9月・12月)

伝道
編集：僧侶養成部(布教使担当)　発行：本願寺出版社
あなたの聞法・伝道のお手伝いを―。
布教使、僧侶、門信徒のための一冊。
年間購読料 2,000円(税・送料込)
1部1,000円(税・送料込)
年2回発行(3月・9月)

好評連載中
FOR YOU 仏壮会員のあなたへ
仏教壮年会連盟の協力のもと、仏壮会員向けのニュースや話題を掲載。
門徒推進員フォーラム
各地で活躍する門徒推進員のニュースを中心に、幅広く情報提供を行うコーナーを掲載。
カラーグラフ お念仏の法味紀行
釈 徹宗の『随縁対談』
金言礼讃／満井 秀城
『拝読 浄土真宗のみ教え』の味わい／藤井 邦麿
ひかりの中で 往復書簡／大平 光代・岩元 綾
法話 みほとけとともに

み教えの情報誌 月刊 大乘（だいじょう）
購読2カ月分プレゼント
ちょっとお得 大乗を読もう！キャンペーン
キャンペーン期間 2014年3月31日のお申し込みまで
キャンペーン期間中、新規で年間購読(12カ月分)をお申し込みいただいた方には、特典として14カ月分お送りします。(現在ご購読の方には、本願寺オリジナルグッズをプレゼントいたします)

1冊 375円(税・送料込)
年間購読料 4,500円(税・送料込)
毎月1回発行

一家に一紙、本願寺の新聞
本願寺新報
明治30年創刊。仏教界で最長の歴史と伝統
「本願寺新報」は門信徒の方々、みなさまの新聞です。本山や地方の法要・行事のニュースや、東日本大震災への取り組み、味わい深い法話、わかりやすい聖典の解説、俳壇・歌壇など、毎回読み応えのある充実の紙面をお届けします。
1部 120円(税・送料込)
年間購読料 4,080円(税・送料込)/毎月3回(1日・10日・20日)発行/毎号8ページ/お盆(8月1日号)と新年(1月1日号)は特集号
好評連載中
コラム 食と健康の教室 京都女子大学栄養クリニック
栄養のバランスと健康の関係や、効率よく栄養をとる方法などを紹介。
ビハーラ本願寺 ふれあい日記 字問字答 一言編 長宝寺前住職・書家 筑間 宗融
仏教語の書をしたため、その意味を味わっていく「新報版・掲示伝道」。
法話と聖典のページ
みんなの法話 阿弥陀経のまナビ 河智 義邦
(毎月1回)『拝読 浄土真宗のみ教え』を味わう

本願寺出版社 0120 FreeDial 0120-464-583 FAX 075-341-7753 ※FAX番号のお間違いにご注意ください　〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル(西本願寺)　http://hongwanji-shuppan.com/

お盆だからこそ考えたい

生きるということ

お盆の迎え方 こころ編

実践編の次は、自分のいのちを見つめてみませんか。
阿弥陀さまやお浄土の温もりが伝わってきます。

私のいのちはどこから

私のいのちはどこから来たのでしょう。

自分の幼い日の話をする時、「私が物心ついた頃」という言葉をよく使いますね。多くの人にとって自分の記憶の最も古いことは、この「物心がついた頃」ではないでしょうか。その物心ついた頃のことでも、いざ思い出そうとするとあやふやになってしまいがちです。

もっといえば、私が母親のお腹にいた頃、そして「オギャーッ」と生まれてきて、自然に母乳をもらって育った頃など、記憶にはないけれど「物心ついた頃」よりもっと前から、私のいのちがありました。

ですから、物心がつくまで私のいのちがどのように成長したのかということや、私のいのちがどこから来たのかということは、正直いって自分ではわからないのです。もっといえば、私のいのちは私以外の人に支えられてきたいのちであるのです。

今、生活している毎日を振り返ってみましょう。私たちは、食事をしなければ生きていけないように、1日たりとも他のいのちをとらずには生きていくことはできないのです。私のいのちは、多くのいのちとみなさまのおかげによって存在するいのちです。

食事だけではありません。普段、私は何気なく生活していますが、その一つ一つを「ご縁」という仏教の目で見ると気付くことがたくさんあります。多くのおかげがあり、生かされている、支えられている私のいのちだったのです。

生かされ、支えられて

「おそれなくても大丈夫」

どこから来たのかわからないけれど、生かされ、支えられている私のいのちは、どこへ向かっているのでしょうか。

「独りで生まれ、独りで死んでいく」という言葉が『仏説無量寿経』というお経にあります。家族や友達に囲まれてワイワイガヤガヤと過ごし、永遠にずっと生きていたいという私の思いが、必ず打ち砕かれることを教えてくださる言葉です。

たったひとり、何もわからずに生まれてきたように、この世の縁がつきたならば、死んでいかなければならない。それが私という存在です。

死んでいかなければならないのですが、その日がいつのことなのかはわかりません。スケジュール帳に自分の死ぬ日は記せません。できればずっと遠くに追いやっておきたい、いや書きたくないのですが、なかなか思うようにはいきません。必ず死はきます。この世の縁がいつ終わるかわからないまま、日々を慌ただしく過ごしているのが私です。

その死というものに「おそれなくても大丈夫だよ」と知らせてくださるのが阿弥陀さまです。

私はどこへ向かって

自分中心の私が仏に

浄土に生まれるとはどういうことなのでしょうか。どこか違う場所に生まれるということでしょうか。

浄土に生まれるということは、生きとし生けるものすべての幸せを実現するために活動する、智慧と慈悲をそなえた「仏（ブッダ・覚者）」になるということです。

そんなことが私にできるのでしょうか。だっていつも私は、自分を中心にして「あの人は好き」「あの人は嫌い」「あの人はいい人」「あの人は悪い人」などと分別しています。実は「愛」も「憎しみ」も同じこと、自分を中心にして考える中で生まれる心なんです。その愛憎にゆれる心を転換させ、自分の利益しか考えなかった私を、智慧と慈悲の仏に転換すること、それが浄土に生まれるということなのです。

浄土真宗では、「自分で仏（覚者）になりなさい」とはいいません。だって、自分の心の中を見ると、とてもとても無理なんですから。その私の救いを実現させようと、阿弥陀さまはさとりの世界（浄土）から迷いの世界に「ナモアミダブツ」のよび声となってはたらきかけ、私たちをさとりの世界へと生まれさせてくださるのです。これが浄土真宗でいう「本願他力」です。その世界に生まれると即座に、智慧と慈悲が完成され（成仏）、苦しみ迷っている人を救い続ける仏に転換するのです。

浄土に生まれる

これ
ること
まり、
いのち
ました
それ
を歩む
る」と
関係す
今ま
の見方
苦しん
阿弥陀
（本願
への道
いてい
心の人
向転換
す。阿
光に照
とは、
な生き
分の姿
うこと
阿弥陀
に「わ
おもい
は、私
死んで
阿弥陀
界であ
いくこ
という
いを聞
阿弥陀
したが
させら
自己
や行動

いま、生きるということ

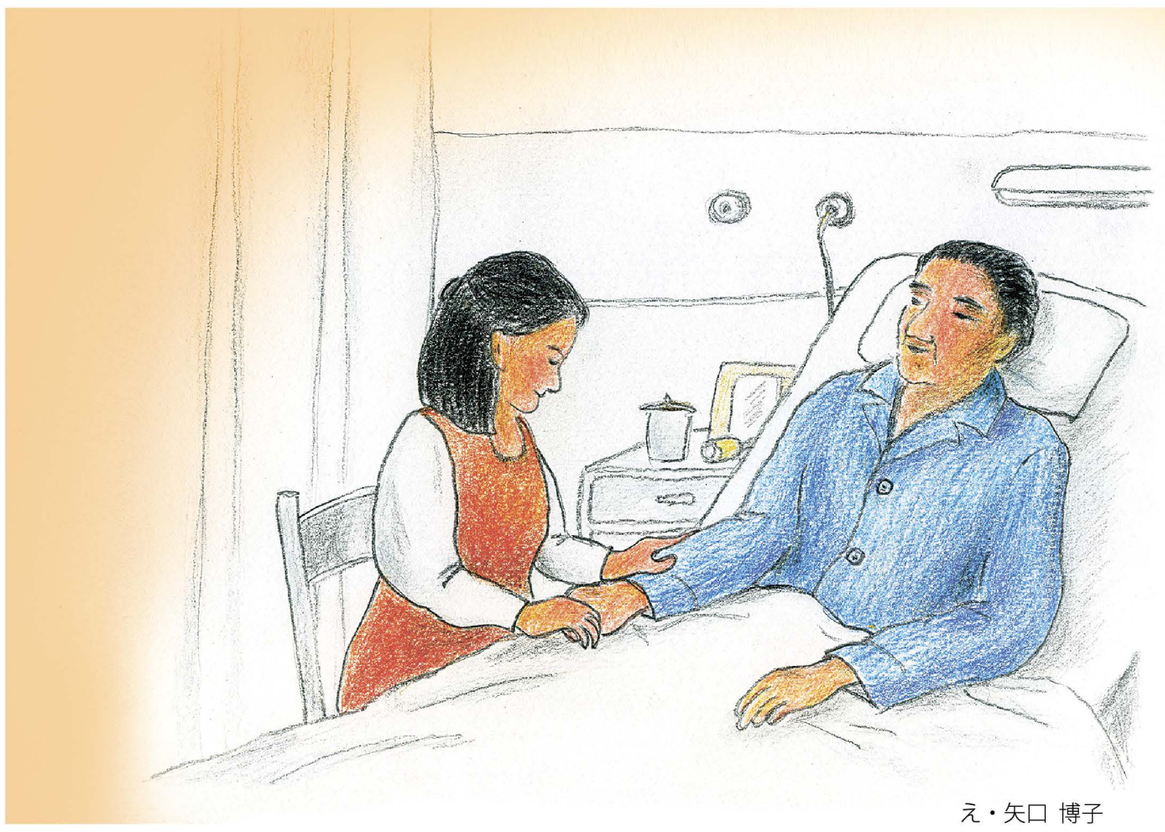
大切な人を思うお盆。
亡き人をご縁に、自分の「今」を見つめると、
「生きる」ことへのメッセージが聞こえてきます。

命終える時まで

私の右胸には乳房がない。7年前、全摘手術の前日、担当の看護師が、早めの入浴を勧めてくれた。子どもは二人とも母乳で育てた。この中に、悪性の腫瘍が巣くっているなど信じられない。早く気付いてあげられなくてごめんなさい。43年間、私の身体の一部で居てくれて、本当にありがとう。大学病院の小さな浴室の中で、明日には切り取られてしまうそれを、私は丁寧に洗った。

翌日、手術室に入る時、付き添ってくれている夫に、「もし私に何かあっても、お母さんは南無阿弥陀仏の中でいつまでも生きていると、子どもたちに伝えてください」と頼んだ。当時、息子は中2、娘は小4。夫は、「それはお前が自分で言え」と笑った。その笑顔に「大丈夫だから心配するな」という夫の深い優しさを見たような気がする。おかげで、私は無事に手術室から戻って来られた。

浄土真宗では、死んで終わりじゃないいのちだと教えてくれる。阿弥陀如来が必ず仏にすると、願ってくださっているいのちである。南無阿弥陀仏の中で、また会える世界があると聞かされてきた。けれど、いつまでも私を覚えていてほしい。忘れないでいてほしい。子どもたちとつながっていたいと願ったのは、私の、母親としての根深い欲であったと思う。



え・矢口 博子

人間は、この命終えるその時まで欲の尽きない生き方しかできない。その思いの愚かさを私に教えてくれたのは、今は亡き父であった。

「今までありがとう」

息子が幼稚園の頃だった。教育講演会で、「子どもを、いじめられっ子にも、いじめられっ子にしたくなければ、お互いに迷惑かけても、かけられても良いような友だち関係を作ってあげることが大事」と聞かされた。私は帰宅して、父に「それって、親同士が仲良くしなさいってことよね」と話した。

父は、「迷惑をかけるとか、かけないとか言うよりも、迷惑をかけなければ生きられないのがなんだ。子どもには、そのことを教えてやらんといかんなぁ」と言った。そして「迷惑とは、迷いの惑うと書く。迷い、惑っているのはこの俺だな」と続けた。当時、父は病を抱えて入退院を繰り返していた。「南無阿弥陀仏をしみ味わうと、倶会一処という言葉が身に染みるなぁ」と言っていたのも、この頃だった。

息子のランドセル姿を見ることなく父は往生した。亡くなる前の夕方、病院にずっと付き添っていた母から「今晩がヤマかもしれない」と連絡があった。父は、覚を見るから、という理由で痛み止めの注射を拒否していた。しかし、手足を擦りながら、私には父に告げたい一言があった。それは「お父さんの娘で良かった。ありがとう」という言葉だった。

けれど、一生懸命、病気と闘っている父に、そんな言葉を言ってしまうと、生きようとしている気力が萎えてしまうのではないか、なかなか言い出せないまま日の昼を迎えた。そんな時、私の口からふと出てきてくれたのは、

大

東日本大震災から考える「生きる」ということ

東日本大震災から3回目の夏を迎えた東北。被災地に生きる人々は、苦しみ悲しみを抱えながら、それぞれのペースで「復興・再生」の言葉と向き合っている。福島の門徒男性は原発の被害から立ち上がり、「震災で犠牲になった亡き妻の分も」と農業復興に全力を注いでいる。また、被災した仙台の門徒夫妻と沖縄の青年門徒は、震災ボランティアを通して「出会い」を語ってくれた。震災を乗り越え「生きる」姿があった。

亡き妻、そして先祖に誓う農業復興への思い

福島県南相馬市／八津尾初夫さん

「今年こそこの地の米を出荷したい」

■「今年こそこの地で育てたお米を出荷したい」。震災直後から、福島県南相馬市の田畑で試験栽培を続ける専業農家の八津尾初夫さん（63／同市・常福寺門徒）は、鏡のような水面に早苗が並ぶ田を見つめつぶやいた。

初夫さんは26歳で一子さんと結婚し、翌年からハウス栽培と米作りを効率よく運営する新型の農業を2人で始めた。技術を探求し、寝る間も惜しんで野菜作りに取り組んだ。「余分な苗は市場に出荷した。園芸ブームが後押しし、ピーク時には年間30万本を出荷し規模拡大につながった」と話す。年々、農地を拡大し、水田15㌶、ブロッコリー畑9㌶、野菜や花の育苗ハウス30㌃となった。従業員5人、パート6人を抱える農業経営者に成長した。6年前には福島県の農業賞（農業経営改善部門）も受賞した。

「もうかる農業の形を築きあげ、それを長男に継がせたい」。その夢が初夫さん夫妻の苦労を支えていた。

江戸時代、人口の4割が犠牲となった天明の大飢饉。北陸地方から移住してきた真宗門徒が荒廃した地を復興、代々200年以上かけて耕し、美しい農地を築きあげた。その美田を、新しい農業の形にして継がせたかった。

◇

■2年前のあの日、大津波は初夫さんの家、農地、専業農家の仲間、そして最愛の妻をのみ込んだ。

自宅近くの畑にいた。大きな揺れに慌てて自宅に戻ると津波が襲ってきた。居合わせた妻や孫など家族・親戚10人は2台の車に分かれ逃げた。初夫さんは孫3人と母親らを乗せて先を走った。気付くと、親戚2人を乗せて後ろを走っていた一子さんの車がバックミラーから消えていた。

無言の一子さんと再会したのは14日後の3月25日だった。「面倒見がよく、周囲から慕われた自慢の妻だった」。

◇

■「妻とやってきた農業をやりたい。できるものから栽培を試し、ここで生きることができることを実証したい」。初夫さんは一子さんに農業の復興を誓った。

しかし、大きな障害があった。東京電力福島第1原発の事故である。自宅や農地は原発から20数キロ地点。放射線量は低い方だが、津波による塩害に加え、復興計画など行政上の問題も立ちはだかる。

それでも初夫さんは震災の翌月から、津波で潮をかぶった畑で、ジャガイモ、カボチャ、ホウレンソウの試験栽培を始めた。そして田も除塩し苗を植え、秋には立派な稲が実った。

しかし、放射能の問題からすべてを破棄しなければならなかった。「実った稲は、放射線の数値を計るためだけに脱穀し玄米にした。風評被害防止だけのために捨てさせられた。1キロあたり104ベクレルで、当時の基準値は500ベクレル。食べられる新米を捨てることはつらかった」と語る。翌年も収穫前に出荷不可と決まり、青田刈りした。

◇

■大震災から3回目となる今春、一筋の光明が差した。

作付けは基本的には見送りだが、放射線量の数値が低い地域に限り、除染し、行政に申請すれば安全な米が作れるかを試す実証栽培が許された。収穫される米が100ベクレル未満なら出荷が許される。初夫さんは35㌃の田で実証栽培に挑んでいる。

「震災前と比べると40分の1。ご先祖が作り上げてきた豊かな土を削り、土作りから始める。それでもここで米が作れることを証明し、安全な米を出荷したい。お浄土に往ってしまった方々に緑豊かで、子どもたちの歓声がこだまするようなふるさとに再生、再興ができたと報告するために」

初夫さんが避難する借り上げ住宅にはお仏壇が安置され、一子さんの遺影が飾られる。不可能を不可能とあきらめず、田に向かい続けるひたむきな姿が尊く見えた。

「ボランティアさんの支えあったから、進んでこられた」

■「旅行なんてしたことないんだけど、落ち着いたらいつか沖縄にいってみたいっちゃ。夢ができたねぇ」

仙台訛りで朗らかに笑うのは、仙台市宮城野区・専能寺門徒の遠藤喜一さん(70)。隣で妻・アサ子さん(66)も一緒にうなずく。

沖縄には会いたい人がいる。震災後ボランティアに来てくれた、宜野湾市の屋我真也さん（44／読谷村・真常寺門徒）だ。夫妻と屋我さんは2回しか会ったことがない。しかし、この「夢」は夫妻の「生きる道」とつながっている。

◇

■遠藤さんは大震災の津波で、海岸から1キロにある自宅や田んぼがのまれた。親戚、きょうだいなど数軒が肩を寄せ合いながら暮らしていたが、遠藤さん宅以外はすべて流された。なんとか残った家の1階はヘドロや流入物で埋めつくされ、家の前のビニールハウスはぐちゃぐちゃに壊された。

「『ご先祖が残した家があるから逃げたくない。おら、どうしてもここに住みたい』って言ったの。でも息子家族

『拝読 浄土真宗のみ教え』を味わう ⑲

『拝読　浄土真宗のみ教え』は、日常の礼拝の際に拝読、拝聴することで、み教えに触れていただき、その味わいを深めてもらおうと、２００９年に刊行された書籍です。ここでは、同書の味わいをさらに深めてもらうため、拝読の文章と法話を合わせてお届けします。（通常号は毎月20日号に掲載しています）

拝読

お盆

亡くなられた先人たちのご恩に対し、あらためて思いを寄せるのがお盆である。
親鸞聖人は仰せになる。

願土にいたればすみやかに
無上涅槃を証してぞ
すなはち大悲をおこすなり
これを回向となづけたり

浄土へと往生した人は、如来の願力によってすみやかにさとりをひらき、大いなる慈悲の心をおこす。迷いのこの世に還り来たり、私たちを真実の道へ導こうと常にはたらかれるのである。

仏の国に往き生まれていった懐かしい人たち。仏のはたらきとなって、いつも私とともにあり、私をみまもっていてくださる。

このお盆を縁として、すでに仏となられた方々のご恩をよろこび念仏申すばかりである。

※『拝読　浄土真宗のみ教え』（A5判54ページ・315円）は、本願寺出版社で扱っています。お求めは注文専用フリーダイヤル0120（464）583。

一番美しく、尊い姿

お盆を迎えて、先立たれた懐かしい方々のご恩を偲び、あらためて面影やかけていただいた言葉に思いを寄せて、手を合わせておられる方も多いと思います。私たちは、偶然の出会いと突然の別れの人生の中にあって、何を大切に生きているのでしょう？　私は、いつから手を合わせるようになったのでしょう？

手を合わせ、頭を下げることを、合掌・礼拝といいます。人間が行う動作の中で一番美しく、尊い姿であると教えていただいたことがありますが挙がりません。手を挙げてくれるのは、毎週教会に通うキリスト教の生徒さんです。いつも牧師さんの話を聞いてわからないところを私に質問してくれるので、私も『聖書』を勉強しました。一番私の授業を聞いてくれていたのかもしれません(笑)。

「仏教の人はいませんか？」と聞きますが、誰も手を挙げません。そこで質問を変え「お盆に家族でお墓参りに行く人？」と聞くと、ほとんどの人が手を挙げます。仏教に関わっている意識はありませんが、自然と幼い頃からみんな手を合わせているようです。私自身、幼い頃から家族と共にお盆にはお墓にお参りし、手を合わせてきました。生徒たちと同じように、私も自然と手を合わせる身に育てられていることを教えてもらいました。

え／ひじ みえ

亡き人の願いに動かされ

お盆になると思い出す親戚のお兄さんがいます。昨年、七回忌をおつとめしました。病気での突然の別れでした。優しいお兄さんで、大学を出たばかりで何もわからない私に、お盆参り、ご法話など、お寺のことやお坊さんとしての心構えをたくさん教えてくださいました。

手を合わすことは、相手を敬い、心豊かに生きていく仏教徒の姿として、インドから中国、そして日本へと伝承されてきました。

お盆は、先人方が私たちに、忙しさの中で「何か大事なことを忘れていませんか？」と手を合わす素晴らしい場所と尊い時間を用意してくださっている仏事です。

あなたの宗教は？

以前私は、高校で宗教の教員をしておりました。毎年、新入生の初めの授業で「あなたの家の宗教は？」と問いかけるのですが、ほとんど手